正月飾り・春の七草

1．注連飾り

正月に家に飾る注連飾りは、早くて年末の27日頃から作り始め、30日には飾りつけました。31日に作ったり飾ったりすることは「一夜飾り」といって忌み嫌われました。

神社の注連縄には、神聖な場所であるというしるしとしての意味、内部に悪いものが入ってこないように区切る意味などがあります。そのため、家に飾る注連飾りは主に神棚、床の間、カマド、臼、便所、トンボグチ（入り口）、倉など、「神が出入りする」または「神が宿る」と考えられている場所に取り付けていました。そして家の敷地内に稲荷様や庚申様、道祖神などが祀られている場合は、そこにも飾りました。

注連飾りには、いくつかの種類があります。例えば神棚の注連飾りは、竹の横棒に藁を垂らし、その藁を数か所くくってW字型に隙間を作り、そこに橙・譲葉・裏白・御幣などをつけるという形式のものでした。ただし下鶴間地区では、神棚にダイコンジメと呼ばれる形状のものを飾っていた事例もあり、市内でも地域によって注連飾りを飾る場所や形状は様々です。

神棚の正月飾り（下鶴間）
（大和市『大和市史』1996 年、173 頁）

郷土民家園旧小川家で作って
いたものと同じ形式の玉飾り

注連飾りを下げるタイミングは家や地域によって異なり、4日に家にくる僧侶に下をくぐらせてはいけないといって4日の朝に下げる家があれば、7日に七草粥を供えてから下げるという家もありました。

ちなみに、浄土真宗の家では注連飾りなどの正月飾りをしませんでした。注連飾りと同じく正月に飾られる門松は、宗派に関係なく飾る家と飾らない家が点在していたようです。

2. 春の七草

1月7日は七草といい、春の七草が入った七草粥を食べます。春の七草とはセリ（芹）・ナズナ（薺）・ゴギョウ（御形）・ハコベラ（繁縷）・ホトケノザ（仏の座）・スズナ（菘）・スズシロ（蘿蔔）のことを指します。それぞれ消化の促進や整腸などの薬効があり、お正月のご馳走で疲れた胃腸をいたわるため、1月7日の七草粥の時に古くから食べられてきました。とはいえ、七草を全て揃えるのは難しかったため、セリなど一部の七草とほうれん草などの青物が入った粥を、塩で味付けして食べる家が多かったようです。そのほかに餅を入れることもありました。

七草粥を作るときは、6日のうちか7日の朝に野菜を用意して、七草を刻むときに唱え言をしました。下鶴間では「七草ナズナ　唐土（とうど）の鳥がわたらぬうちに」、上福田では「七草叩く　何叩く　唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に　パタクサ　パタクサ」、「七草ナズナ　唐土の鳥が渡らぬ先に　トントコトン…」などの唱え言が伝わっています。

春の七草の寄せ植え